

もくじ
ルドルフ・レーマンに出会う旅② レーマン兄弟と京都 … P1
「万控帳」にみる昭和初期の足立の下肥運搬… P3

足立史談

第658号

2022年12月15日

足立区立郷土博物館内

足立史談編集局

〒120-0001

東京都足立区大谷田 5-20-1

TEL 03-3620-9393

FAX 03-5697-6562

ルドルフ・レーマンに出会う旅②

レーマン兄弟と京都

郷土博物館



本誌六五号(本年五月号)で小右衛門新田の日比谷健次郎らがドイツ語辞書『和獨對譯字林』(発行は明治一〇・一八七七年)の編さんにあたり校訂者を探しに明治七(一八七四年)七月に京都で人探しを行った過程を紹介しました。今回は校訂者のレーマンがどのような背景を持つ人物であったのかをご紹介します。

1 レーマン兄弟

■北ドイツ出身のレーマン ルドルフ・レーマンはドイツの北部、オルデンブルク大公国の都、オルデンブルクで一八四二年に生まれました。日本では天保十三年にあたります。天保七(一八三六)年生まれの日比谷健次郎の六歳年下でした。大学はドイツ南部のカールスルーエ工科大学に進み、オランダのロッテルダム造船所に就職しました。

【図1】レーマン関係の京都
レーマンがドイツ語やドイツ学を教えた角倉洋学所と欧学舎の位置。日比谷健次郎らが宿泊したのが鴨川左岸の「美濃徳」であった。「平安遷都千百年記念祭協賛誌 玄武編」(明治一九年・一八九六年)の一部に加筆。

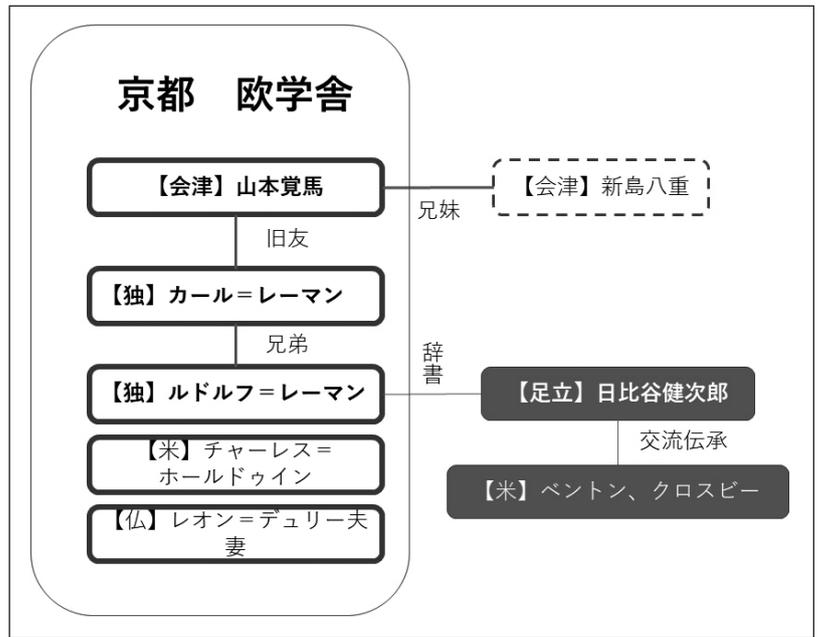
来日したのは一八七〇年(明治二年)二七歳の時で、兄のカール・レーマン(一八三二〜七四)が経営していた大阪の蒸気船造船所に勤務するためでした。

【図2】山本覚馬の写真
青山霞村「山本覚馬」(同志社、一九二八年)より。同志社大学の設立にも寄与している。



■山本覚馬と兄カール レーマンがドイツ学校の教員となったのは兄カールが京都府顧問の山本覚馬と旧知の間柄だったからでした。旧会津藩士の山本覚馬(一八二八〜九二)は、二〇一三年の大河ドラマ『八重の桜』で俳優の西島秀俊さんが演じていたので、ご記憶の方もいらっしゃるでしょう。新島八重の実兄で、のちに京都府議会の初代議長もつとめています【図2】。

カールはドイツの武器商人としても知られており、大河ドラマでは娘のルイーゼも登場していました。カールと山本覚馬は幕末から明治にかけて長く交流します。カールは小銃などの武器を会津藩に供給しています。ちなみに八重が持っていたスベ



【図3】レーマン兄弟の関係

ンサー銃(小銃)は、カールが譲つたものとされています。もともとカールのこうした動きは母国ドイツの動向のちの奥羽越列藩同盟支援にも合致するように見えます。むしろ、その淵源の一つに山本覚馬とカールの交流があったのかもしれない。

■**角倉洋学所・欧学舎の教員** 戊辰戦争後、京都は欧米文化を受容する拠点として目覚ましい発展を見せます。

一八七一年(明治三年)三月、京都の角倉(すみのくら)代官屋敷跡

も、山本とかねてから親交のあったドイツ人レーマンを、彼の勸奨によって京都府が招聘したことが、そもそもの発端であった。」とカール・レーマンと山本覚馬の関係に言及しています。

■**教員となるルドルフ** カールの弟、ルドルフは角倉洋学所が設置されたときに教員となりました。この年はドイツも統一されドイツ帝国が成立、レーマン兄弟が出たオルデンブルク大公国も帝国の構成領邦の一つ

(河原町二条下ル)に設けられた角倉洋学所が設立され、さらに十一月には旧長州藩邸を利用した勤業場内(現ホテルオークラ京都の敷地内)に移転、欧学舎と名を変えます。欧学舎は京都の欧米文化需要のそもそものはじまりとして知られ、欧米の言語と文化を学ぶ機関でした。

多田建次『福沢諭吉と京都人脈』(玉川大学出版部、一九九八年)によれば、「この欧学舎

になっていました。その後、角倉洋学所が欧学舎ともなっても、ルドルフは教員を続けました。

こうして明治七年、欧米文化受容の先進地として発展していた京都に、日比谷健次郎たちは校訂者を求め、ルドルフと出会いました。

2 外国と出会う社会の記憶

■**広がる欧米との交流** 欧学舎はレーマン兄弟の人脈を通じて拡大していきます。アメリカ人チャールス・ホールドゥインが招かれ英語教育と文化を教えていきます。さらに、フランス人のレオン・デュリー夫妻が仏語を教えることとなり、欧学舎は高田別院(河原町通二条上ル)に支舎を設け拡大していきます。

※本項目は「辻ミチ子『転生の都市 京都―民衆の社会と生活―』(阿叻社、一九九九年)による。

人間関係を图示したのが【図3】です。戊辰戦争直後、日本各地で外国文化の取入れが活発に行われていきましたが、その一翼にドイツ語を媒介に日比谷健次郎が登場しています。

■**日比谷家とペントン、クロスビー**

日比谷家には一つの伝承があります。ペントンとクロスビーという宣教師が訪れ、日比谷健次郎と交流したというものです。その際に用いられたというグラスも伝来しています。しかし実態資料がまだ欠けてお

り、推測の域を越しません。日比谷家のその他の伝承と合わせると、リディア・ペントンと、ジュリア・クロスビーという女性宣教師と推定されています。ペントンはヘボン式ローマ字で知られるジェームス・ヘボンが運営するヘボン塾の長、ジョン・C・バラの妻となった人、またクロスビーも同時代のアメリカ人宣教師ジュリア・クロスビーとして推定されています。日比谷家の伝承がどのようなことを示唆してくれるのか、これからも研究の必要があります。ぜひ広範なご教示をお願いします。

※本項目は『井深樞之助とその時代』第一巻(明治学院、一九六九年)および小椋山ルイ『アメリカ夫人宣教師―来日の背景とその影響―』(東京大学出版会、一九九二年)等を参照。

レーマン兄弟と日比谷健次郎の動向を軸に、明治初期の欧米各国の文化を積極的に取り入れようとした人々の交流を見ていきました。そこでは個々の人々が、積極的に新しい文化を受容していく姿が見えてきます。明治初めの彼らの足跡は、私たちに幅広い文化交流を行うことの重要性を示唆しているのではないのでしょうか。

※【図1-2】は国会図書館インターネット公開資料に加筆。(学芸員 多田文夫)

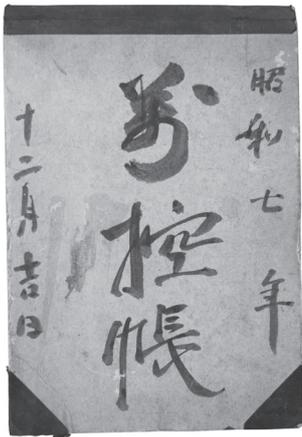
昭和初期の万控帳からみる
足立の下肥運搬

間所瑛史

■足立区と下肥 かつて農村地帯だった江戸東京東郊の足立区では、堆肥を得るための山林がないことと平坦で陸水路が発達していたこともあり、人糞尿をもとにした下肥を肥料として多く利用していました。足立区立郷土博物館ではそうした歴史を反映して、常設展示で下肥に関する展示も行っています。

大正頃までは農家が家々から尿尿（しによろ）を直接購入していました。が、関東大震災後の都市の急激な発展による人口増加により尿尿の量が過剰となり、供給過多の尿尿の価値は下がっていききました。そのためそれまでは汲み取りにお金を払っていた農家が逆に農家が徴収するようになりました。

また、農家が個別に家々を回って自家用のために汲み取る他、汲み取



【写真 1・万控帳】

り専門の業者もおり、農家の中には汲み取り業者から下肥を購入する人もいました。

足立区が河川下流域であることを利用して、都市から汲み取った尿尿を船で運搬する業者も存在しました。尿尿を運搬する船は汚穢船（おわいぶね）や葛西船（かさいぶね）と呼ばれました。船による運搬は人力・畜力による陸上輸送よりも大量の尿尿を運ぶことができ、圧倒的に有利でした。

■小泉家の万控帳 郷土博物館が所蔵している「万控帳」（よろずひかえちよう）【写真 1】は足立区の下肥と農業の歴史を知ることのできる資料です。本稿では「万控帳」からうかがえる昭和初期の下肥運搬業者と農家の関係をみていきます。

「万控帳」は縦 23・5 cm、横

サノ（*佐野） 鈴木勘五郎

記

七年十二月

一 下肥式拾七艘七分五厘

一 代金四拾円八拾七銭五厘

内金拾七円請取（印）

十二月十七日 金拾円請取

差引一 金拾参円八拾七銭五厘

一 金拾四円請取（印）

（ ）内は筆者注

【図 1 万控帳翻刻（一部）】

16・0 cm で、表紙に「万控帳 昭和七年十二月吉日」と記されています。内容は下肥の会計簿で、昭和七（一九三二）年から昭和一一（一九三六）年まで記されています。

「万控帳」は平成二六（二〇一四）年に佐野地域の小泉家から寄贈されたものです。小泉家は下肥運搬船を持ち、下肥の運搬と販売をしていました。「万控帳」はその際の記録です。

「万控帳」は【図 1】のように、購入した農家の居住地名・氏名・下肥の量・代金・徴収日などが記されています。徴収日は八月と一二月が多く、盆と暮れの年二回の集金をおこなっていたことがうかがえます。

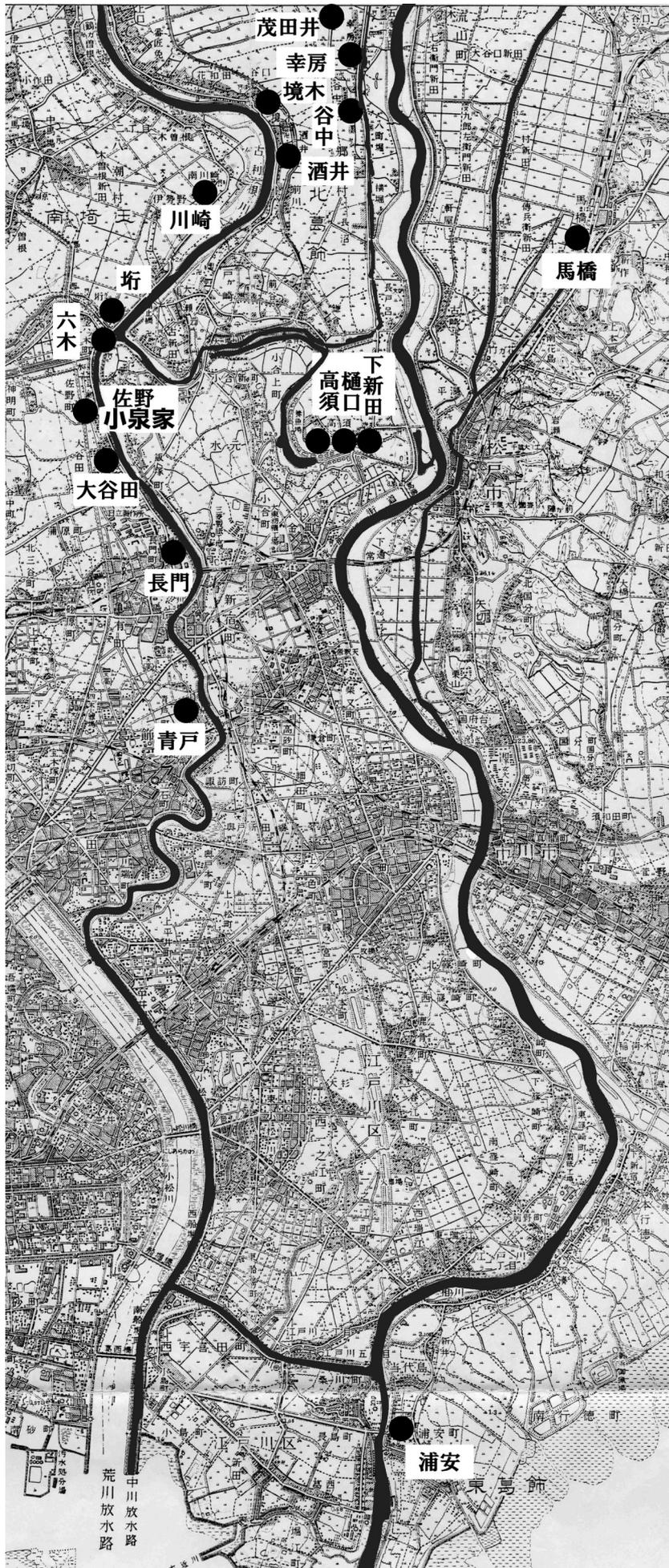
下肥の量は輸送する船、一艘（そう）を単位として数えられており、ほとんどが一艘あたり一・五円前後であることがわかります。一艘あたりの積載量は、およそ三十荷から四十荷が一般的であったようです（注一）。下肥の量は一荷は約二〇貫目（約八〇kg）です。

ちなみに当時の白米の値段は十kgあたり一円九十銭でした（注二）。現在の白米を三五〇〇円として計算すると、二七艘七分五厘（約六六・六トン）の下肥は約七万三五〇〇円になります。これら全てを一軒の農家で使用したわけではなく、地域の農家の代表が業者から下肥を購入して分配していたと考えられます。

下肥の販売量は年によって変動しますが、小泉家では年に二〇〜三〇軒前後の農家と取引を行っていました。平均すると一年間で六〇〇円ほど下肥を販売しています。当時の小学校の教員の年収が約五四〇円でした（注二）。ただし、下肥運搬業の家は農業など他の収入もあるのが一般的でした。

取引をしている農家は五年間毎年取引を行っている農家もあれば、年間だけの付き合いのものもあります。上記で引用した鈴木勘五郎のように、通常は内金を払って後日に残りの代金を支払っている農家が多いです。しかし、翌年に繰り越して代金を支払う農家もいくらか見受けられます。たとえば、川崎の横山栄太郎は昭和七年分の代金の一部を翌年に支払っています。一年ほどの猶予はあったようです。

■取引の範囲 【図 2】は「万控帳」に記された地名の一覧です。図からは佐野や大谷田などの近辺から幸房（現・埼玉県三郷市幸房）や馬橋（現・松戸市馬橋）などの地名が記されており、中川沿いと支流のつながっている江戸川沿いを中心に取引をおこなっていたことがわかります。さらに浦安（千葉県浦安市）の名前も記載されており、遠方とも取引をおこなっていたことがわかります。浦安へは中川と江戸川を繋ぐ新川（船堀川、行徳川）を通って行ったようです。



ただし、大谷田や六木の農家と頻繁に取引している一方、浦安については昭和十一年に一回行っているのみです。「浦安町行」とわざわざ他の箇所には見られない「行」という言葉を使っていることから、珍しい遠方との取引だったのでしょう。

一九三四（昭和九）年になると、東京市によって市営の汲み取りが始まりますが、自家や業者での汲み取りも継続していました。「万控帳」が記された時期はちょうどこの転換期

に相当します。

現在に残された「万控帳」は昭和初期の東京近郊の下肥運搬業者の活動範囲や状況の一端を直接知ることができる貴重な史料です。

注一・荻原ちとせ「下肥に依存する農業―東京東郊の肥料を考え」第二回『足立史談』五二二号、二〇一一年

注二・週刊朝日編『値段の明治大正昭和風俗史・上』朝日新聞社

(郷土博物館専門員)

地名	現行地名
浦安	浦安市
大谷田	足立区大谷田
坂	八潮市坂
川崎	八潮市南川崎
幸房	三郷市幸房
酒井	三郷市栄
境木	三郷市栄
佐野	足立区佐野
下新田	三郷市高州
高須	三郷市高州
長門	足立区中川
樋口	三郷市高州
馬橋	松戸市馬橋
六木	足立区六木
茂田井	三郷市茂田井
谷中	三郷市谷中

【図2・万控帳に記された地名とその所在地図】(昭和36年の地図に加筆)